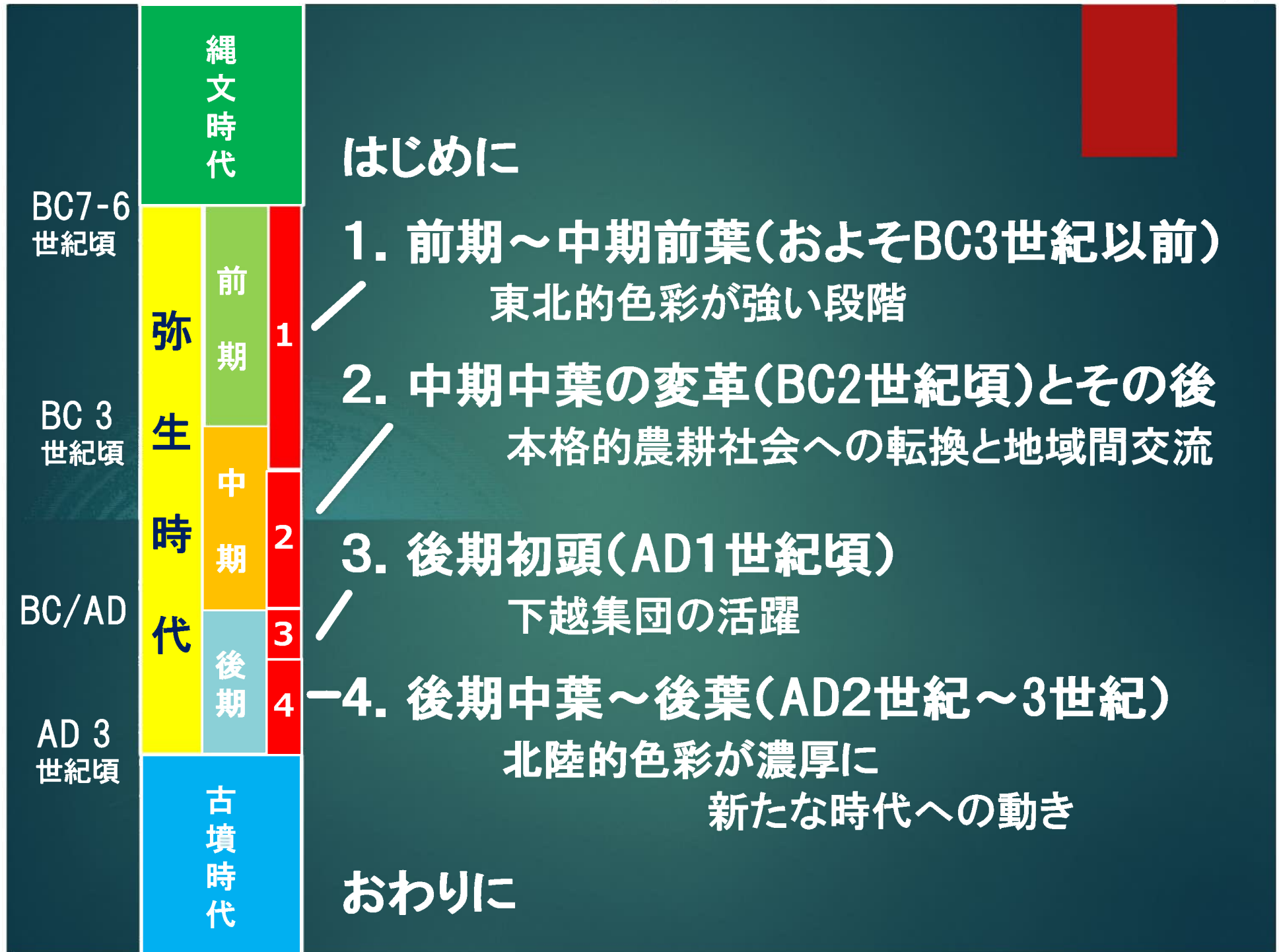


【 最新調査成果が語る新潟市の歴史 新潟市遺跡発掘調査速報会2022 】 2023.02.26

新潟県域の弥生文化の魅力 — 周辺諸地域を結ぶ —

石川 日出志
(明治大学)

© Google Earth



はじめに

私が考古学という世界に迷い込んだちょうどその時、その環境へといざなった(?)故・**関雅之さん**が、新潟県域の弥生文化を総覧して、**新潟県域の弥生時代は「東西文化の接点として複雑な様相を呈」**すると評しました。

今日に比べると当時はまだ発掘資料はごくわずかしかなく、各地で採集された土器片を検討・分析するしかできない状況でしたが、この指摘は**新潟県域の弥生文化の特色を見事に言い当てています。**



(写真:田中耕作氏撮影)

関雅之 1971 : 新潟県域の弥生時代は「東西文化の接点として複雑な様相を呈」する

新潟県における弥生文化

―特にその様相と問題点―

1. 概観

昭和二十二年より四年計画で進められた新潟県考古学調査の発掘調査は、戦後の弥生文化研究に新しい視点を与えることになった。即ち、堅気集落群・水田址・木器など具体的な問題を提起すると共に、関連する自然科学的研究法の重視と資料も特筆すべきことであった。戦後二十余年を経過した弥生文化の研究は急速な進展と共に資料が増加し、問題意識もさまざまな形で変化してきている。特に注目されてきた問題は弥生文化の発生から農耕技術の伝播、農耕協成と共同体の研究、大陸文化との関連、古墳発生の基礎的な問題を有する方形周溝墓の研究など、地域ではあるが大きな学問的展開をみせている。しかし、全国的にみると、弥生文化の研究は地域による格差が大きく、個別的な基礎研究に未解決な点も多々存在するのが現状である。

かかる現状を踏まえながら、新潟県の弥生文化研究を顧みる時、最大の欠陥は資料の不足であり、正式な学術調査資料及びその報告解も少ない。このような状況の為に、ややもすると研究者間に数通されがちとなり、ますます世間的知識を説くことができないう状態で

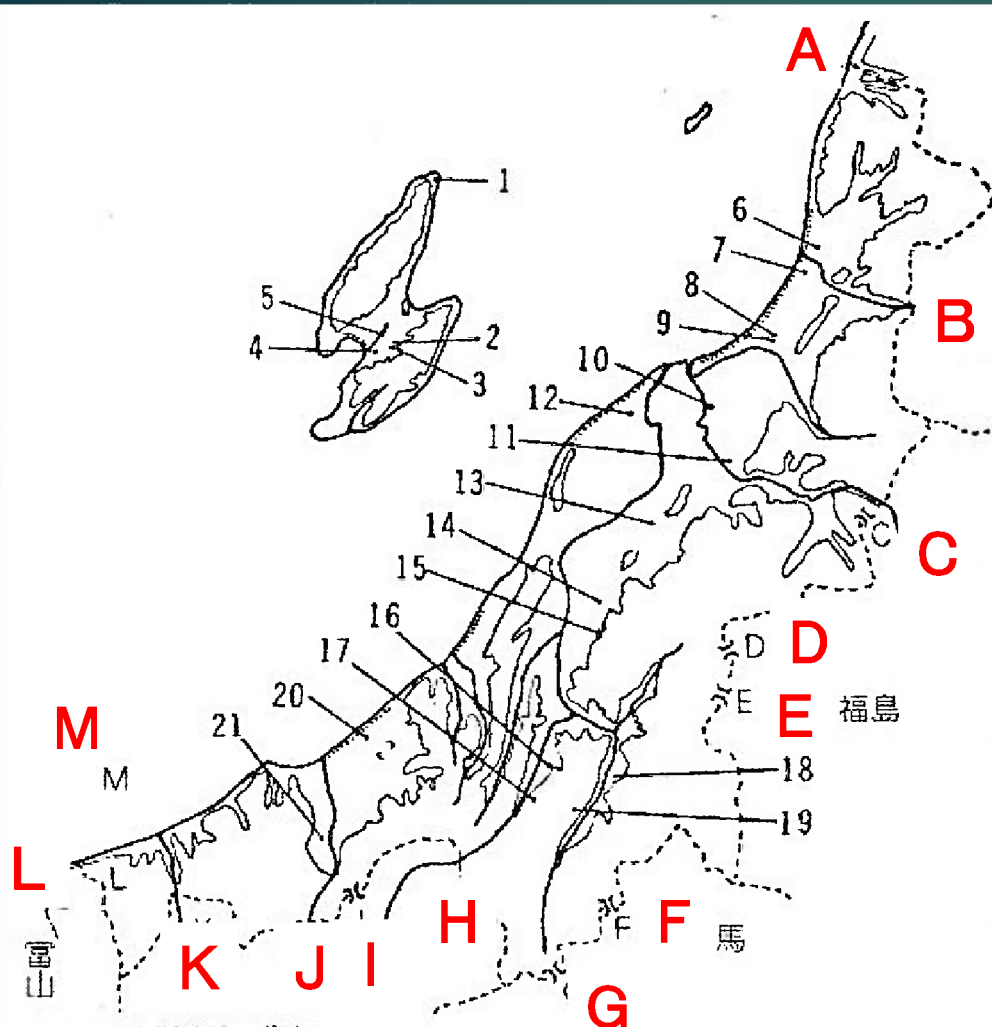
新潟県における弥生文化(関)

あり。

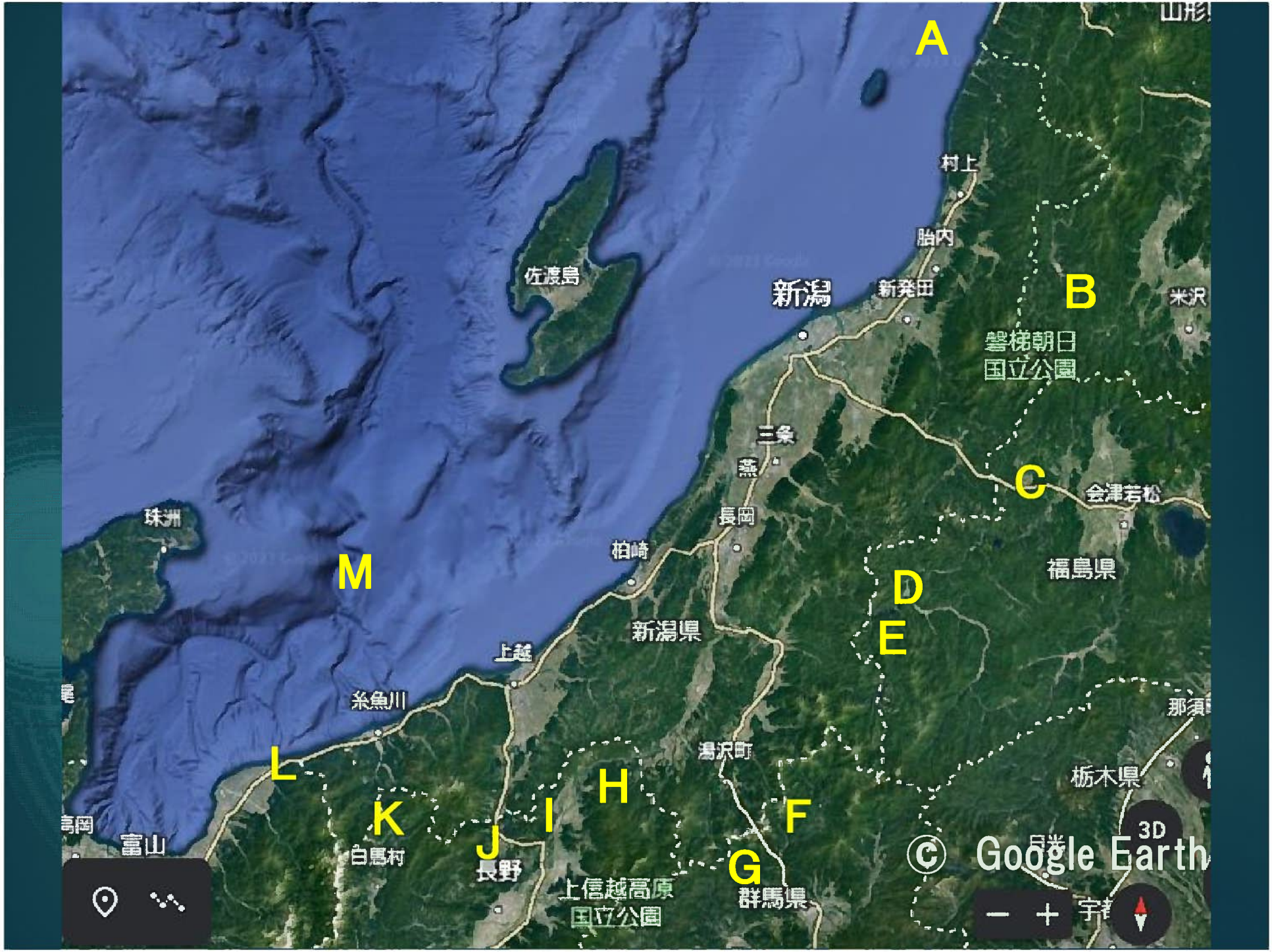
ここで新潟県における先学の研究成果を顧みながら、弥生文化研究の問題点を指摘し、また、本県の弥生文化の性格及びその地域的な様相の一端に述べたいと考えている。過去において、新潟県の弥生文化に関して二・三の私見を發表したことがある。あわせて批判的見解があれば幸である。

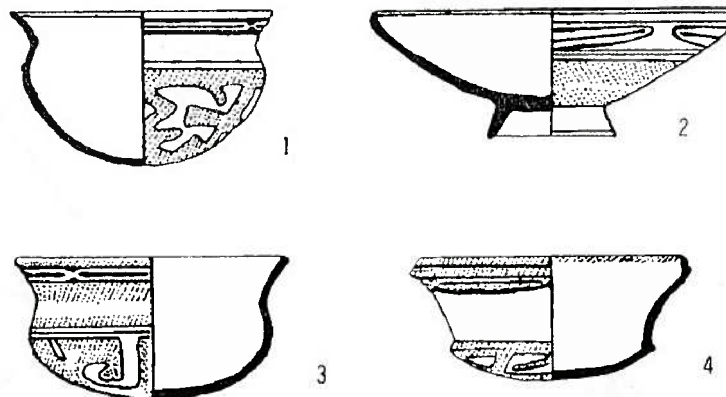
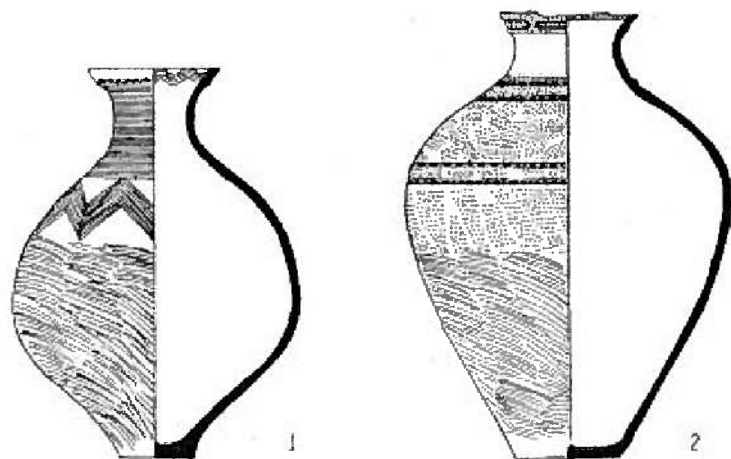
二、文化流入路とその問題

新潟県は北の弁味ヶ岡より西南の根室に至るまで、直線でも約二五〇キロの海岸線を有し、日本列島を横断するワオ・ヤマガタのラインよりも更に長い。そして、前回は日本海、背後は県境をとりまく山岳地帯で遮断された如き状態を呈し、境を接する県は五県にものぼる。第1図に示したA・Mは何等かの形で間接諸地域を結ぶ門戸となった所である。新潟県の先史・原史文化を考察するとき、この門戸で結ばれた諸地域の文化的様相を正しく把握することが前提となる。また、新潟県は前水に細長い為、隣接五県の文化的様相にもかなりの相違がみられ、これらが県内で複雑に重なりあって存在している。特に弥生文化の場合が好例にあり、東西文化の接点と

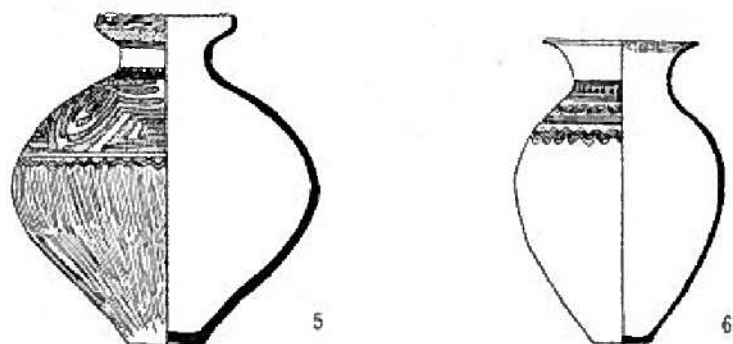
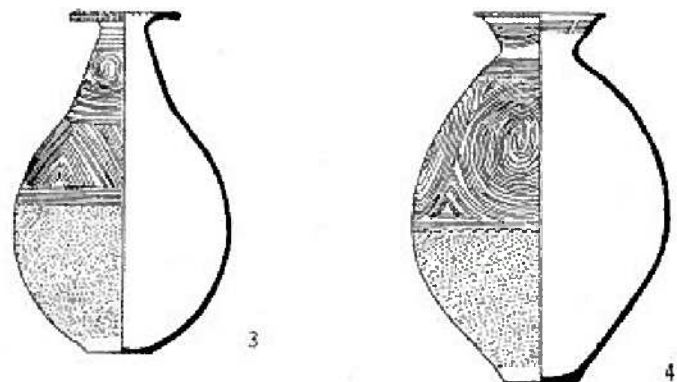


第1図 主要遺跡の分布
 A 念珠ヶ岡(鶴岡方面) B 荒川(米沢盆地) C 烏井峠・阿賀野川(会津盆地)
 D 八十里越(会津盆地) E 六十里越(会津盆地) F 清水峠(群馬県沼田地方)
 G 三国峠(群馬県沼田地方) H 信濃川(長野県飯山地方)
 I 富ヶ崎(長野県飯山地方) J 荒川(長野県長野盆地)
 K 姥川(長野県松本地方) L 親不知(富山県・石川県) M 日本海(北陸地方)



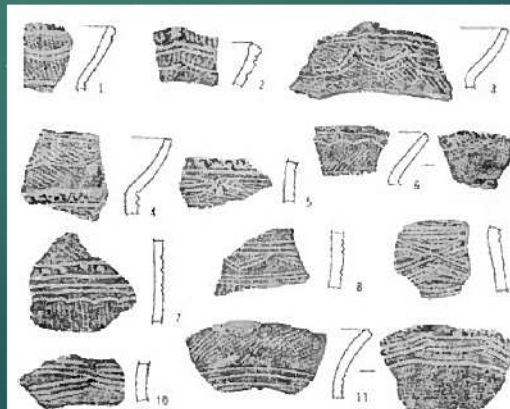


第2図 1・2猫山 3・4六野瀬 (1/6)

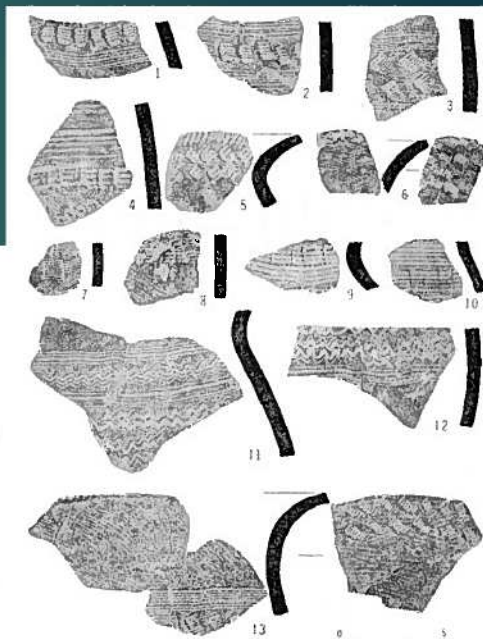


第3図 1・2猫山 3・4山草柄 5砂山 6若宮 (1/6)

現在と比べれば
 ごくわずかの資料から描き出した
 新潟県域弥生文化
 の重要な特色



第4図 阿賀北出土の縄文土器 (弥生時代) (1/2.5)



第5図 阿賀東の横目土器 (1-4乙・5-6甲片・7-13甲片)

現在の目でみると…
それぞれ往来がある！
そして越後のなか、
越後と佐渡との往来も



どこであっても周辺地域とは交流し合っているのが当然なのですが、じつはそれぞれ個性的な東・西・南・北の諸地域との交流がこれほど鮮やかに見出せる地域はありません。それこそが新潟県域の弥生文化の面白さ＝魅力だと思います。

長野県も似ていそうだが
全く異なる

♪ 信濃の国 ♪

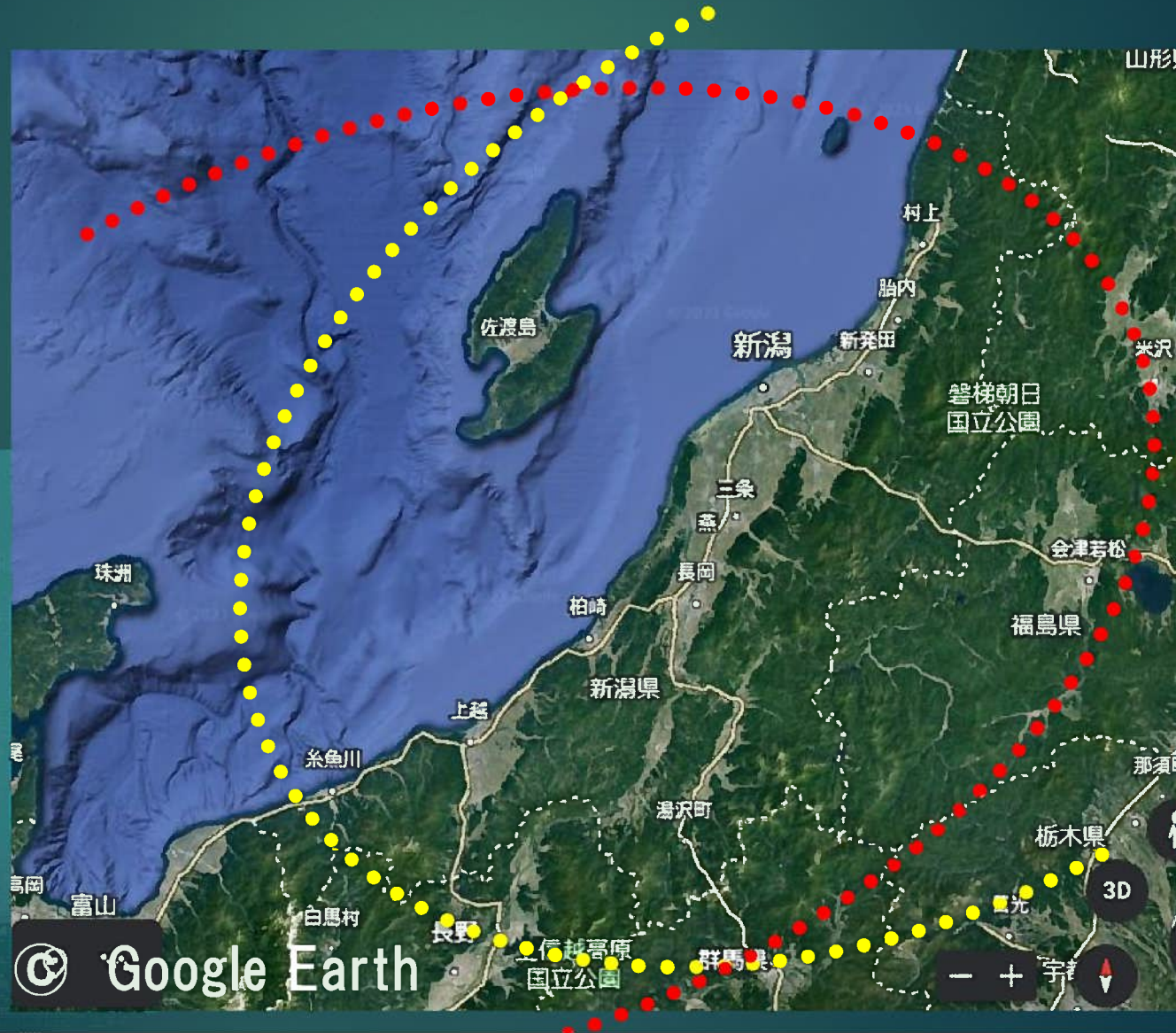
信濃の国は十州に
境連ぬる国にして…



でも、新潟県域の弥生文化の展開を考えるには東西南北の全地域を視野に入れないと実態が理解できないという難しさもあります。時系列にしたがってその要点を見ていくことにしましょう。

東優勢から

西優勢へ

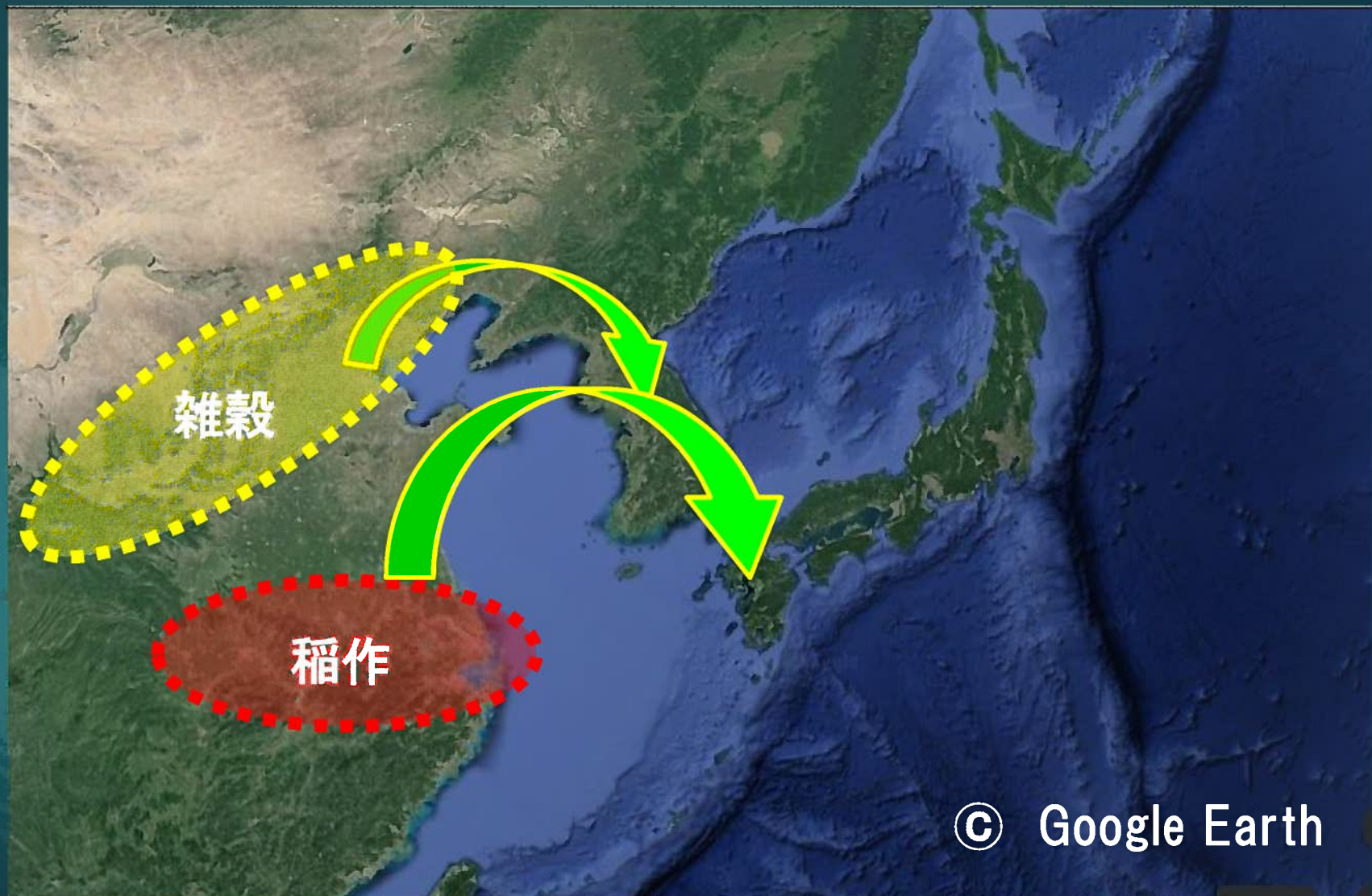


1. 前期～中期前葉(およそBC3世紀以前): 東北的色彩が強い段階

弥生時代の文化は、縄文時代の伝統の上に大陸から稲作をはじめとする新しい技術・情報・宗教などが加わって形成されました。

私は、このうち、日常生活や社会が変わる最たる基礎となった灌漑稲作の開始が一番重要だと考えますので、稲作の始まりをもって弥生時代の開始と判断します。

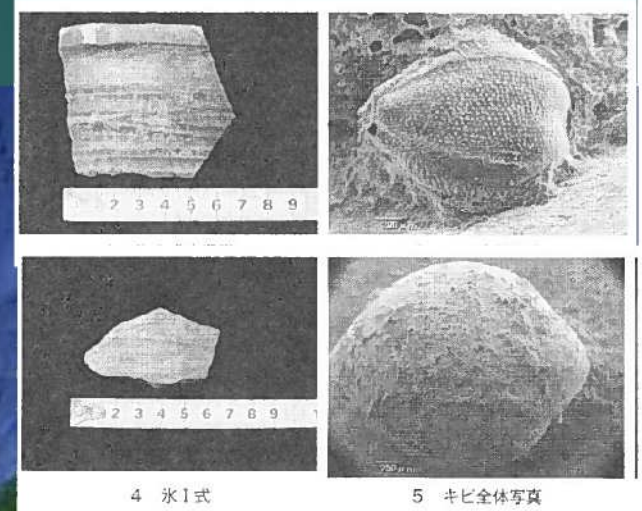
弥生時代開始当初に日本列島にもたらされた農耕は、水田稲作と畠の雑穀(アワ・キビ)栽培が組み合わさっていました。しかし、西日本はまもなく水田稲作に特化します。



一方、東日本ではむしろ雑穀栽培が盛んで、縄文時代以来の堅果類などの食料も継続して利用されています。弥生時代前期段階ですでに西日本では、数ヘクタール規模の灌漑水田を造成・経営するために集住集落が形成され、中期になるとさらに集落規模は拡大しました。



中西遺跡(奈良県御所市)



氷遺跡(長野県小諸市)



ところが東日本や新潟県域では、稲作の本格的導入は行われず、集落は数棟の住居からなるものが基本で、集住する集落は確認されていません。

東北地方には弥生時代前期の水田と報告された実例が二例ありますが、私は中期に下る可能性を捨てきれないと思っています。



砂沢遺跡
(青森県弘前市)

東北では土器に粃圧痕が検出されているので稲作を否定するのは難しいものの、試験的利用に留まると思います。もう一度冷静に考える必要があります。東日本に水田稲作が広く普及するのは中期中葉(BC3~2世紀)になってからだと考えます。

新潟県域の弥生前期～中期初頭を代表する遺跡： 新潟市緒立遺跡・新発田市村尻遺跡・糸魚川市大塚遺跡など

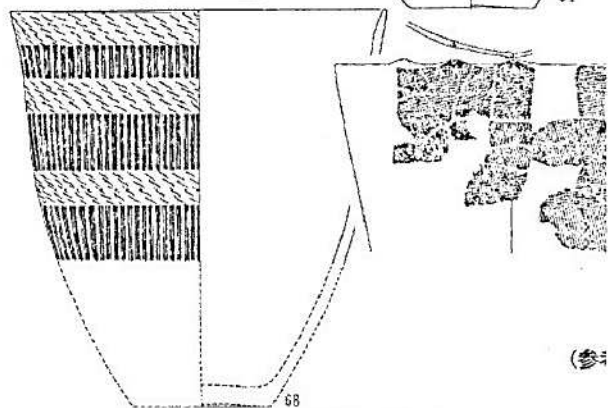
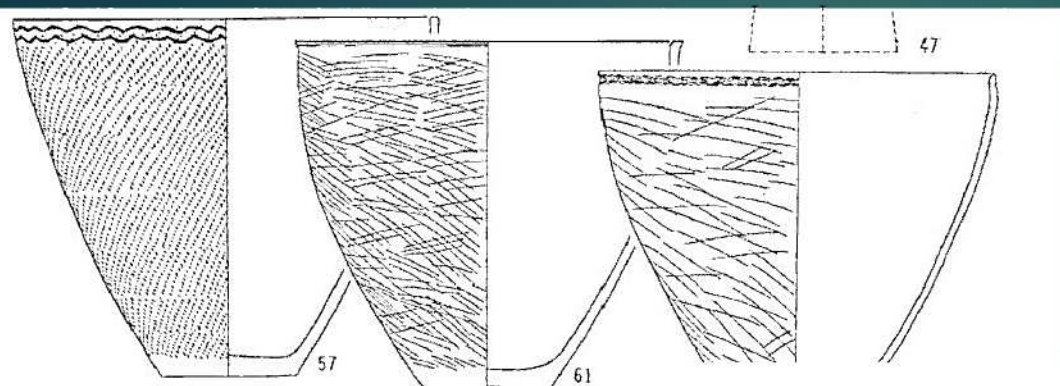
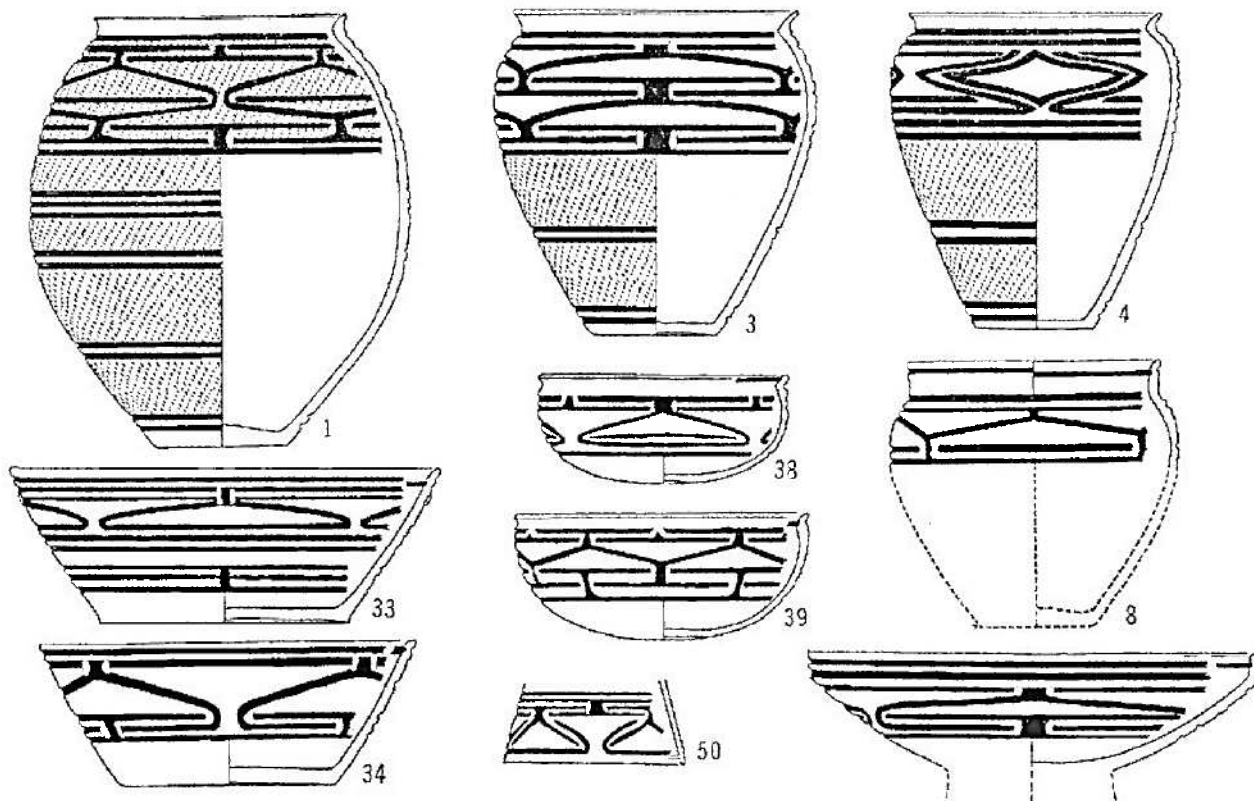
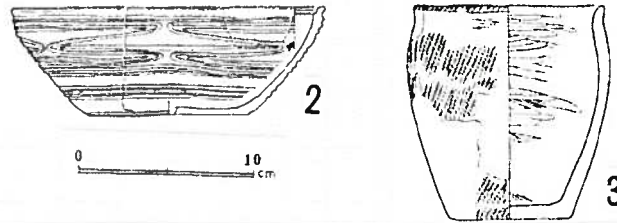
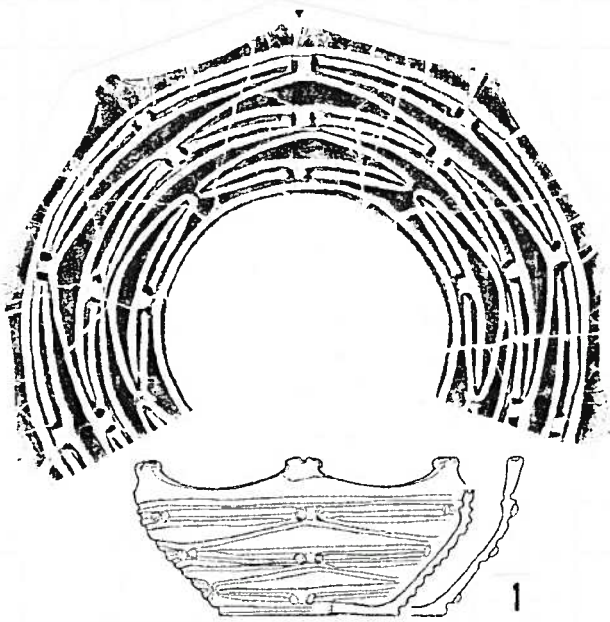


図17 緒立遺跡の研究報告②

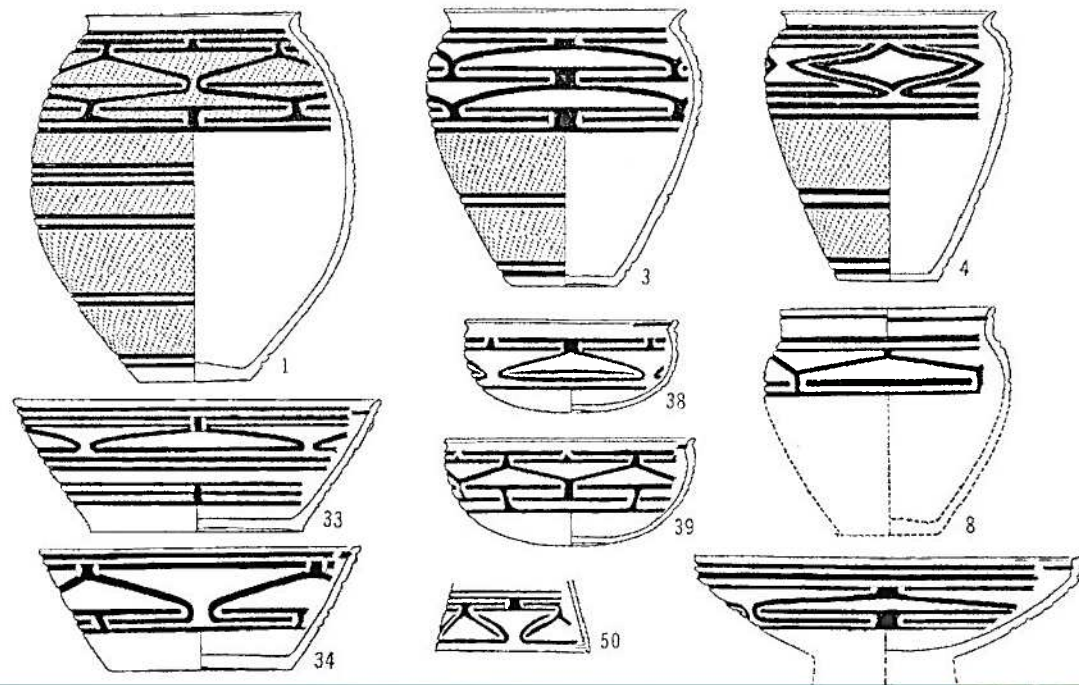
緒立遺跡





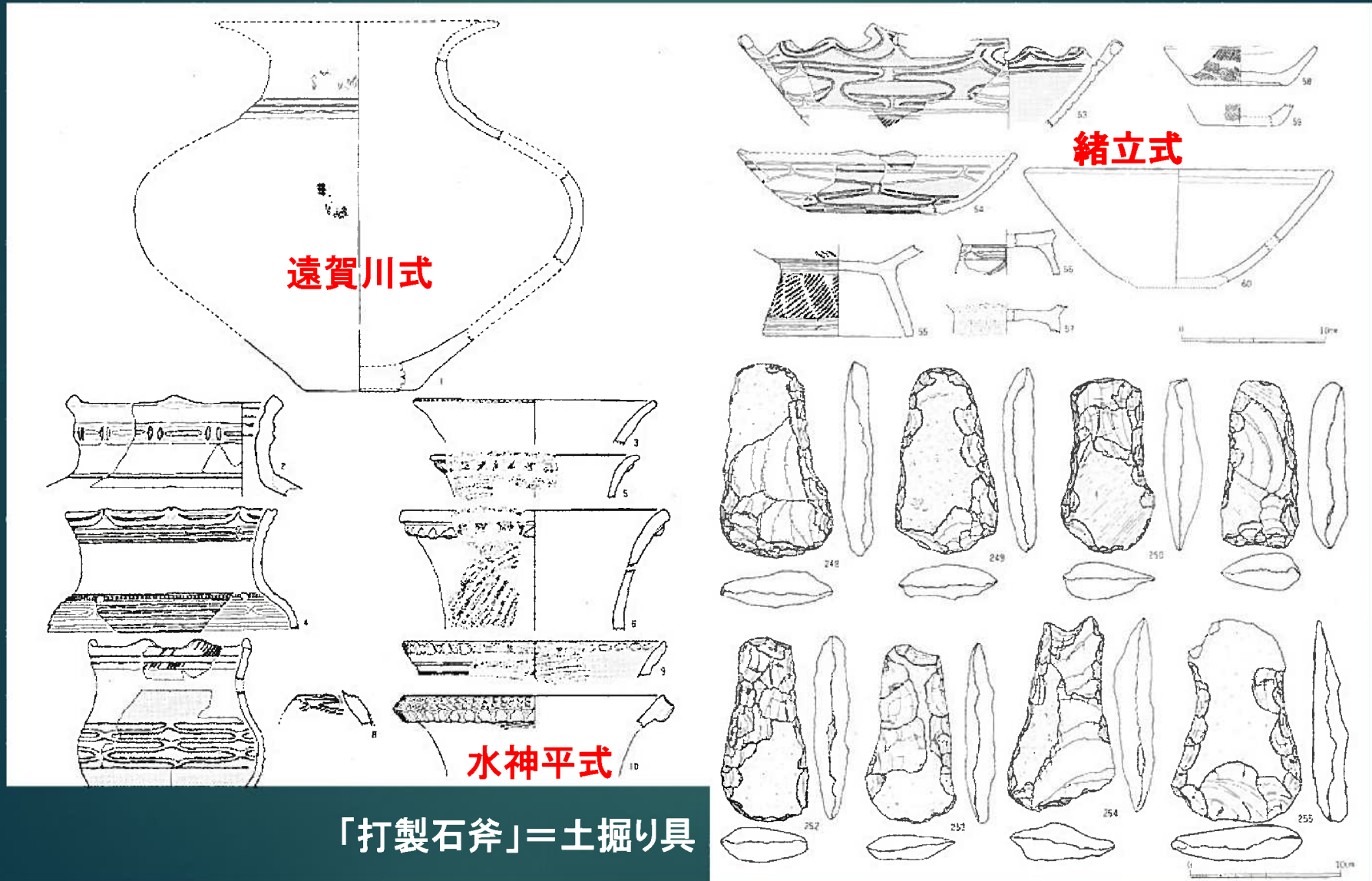
11 弘前市砂沢遺跡の砂沢式土器(1・2)と甕(3) (石川 2005)

砂沢遺跡の砂沢式土器



緒立遺跡の緒立式土器

大塚遺跡では、西日本の稲作農耕民の土器である遠賀川式土器や、雑穀栽培が主流の愛知県東部三河地方の水神平式土器がわずかながら見られますが、東北系の土器が目立ちます。



新潟市緒立遺跡の 焼けた人骨



再葬墓であろう

新発田市村尻遺跡 の 壺再葬墓



図23 新発田市村尻遺跡第91号再葬墓 (石川1982)

新しいカタチの手元供養

大切な人はいつも傍にいて
時には私の手の中で
見守ってくれています。

遺石 いせき

遺石とは戸田祭場研究開発部が開発した、
混ぜ物なしの遺骨100%の人工石です。
いつも身近にあり、故人を偲ぶ形として最も
ふさわしいものと言えます。

仕様

遺骨使用量 遺骨 約60g
遺石サイズ 幅約45mm×高さ約45mm
文字刻印 戒名や言葉などをレーザー刻印します
遺石製作料 210,000円(消費税込み)

●詳しくは、当店にお気軽におたずね下さい。



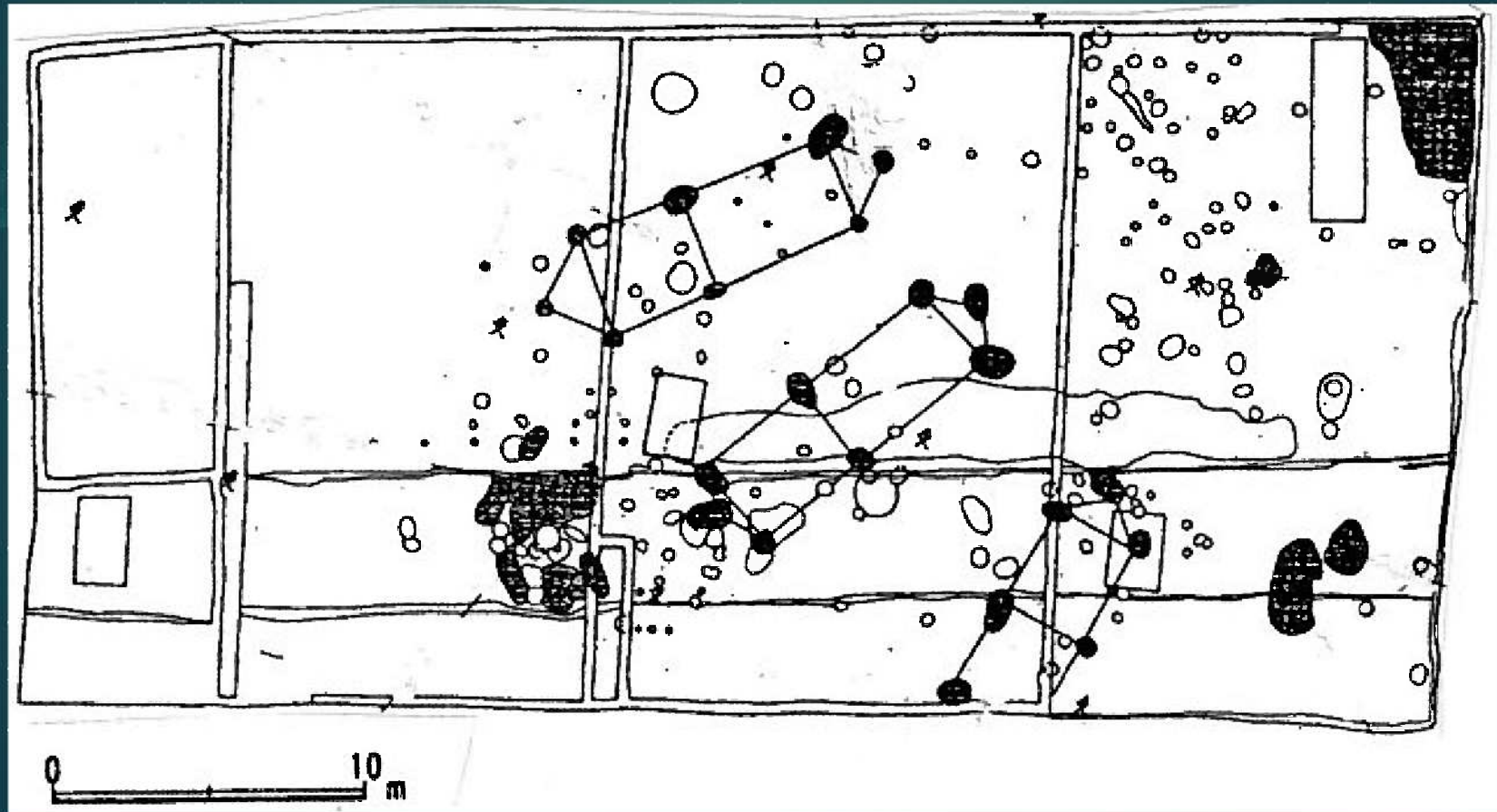
現代の実例



新潟市緒立遺跡の人骨ペンダント

この段階の遺跡で、集落の姿がはっきりとつかめる例はきわめて稀です。

阿賀野市猫山遺跡はその数少ない事例で、新発田市青田遺跡や三条市藤平遺跡のような縄文時代晩期末の実例と同様に、亀甲形の平面形をもつ掘立柱建物が弧状に並んでいます。縄文時代晩期以来の伝統が色濃いものです。



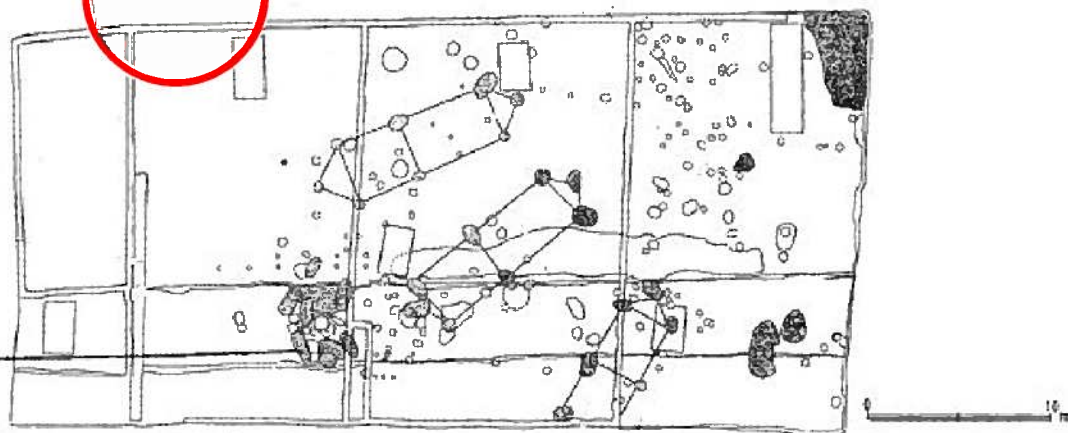
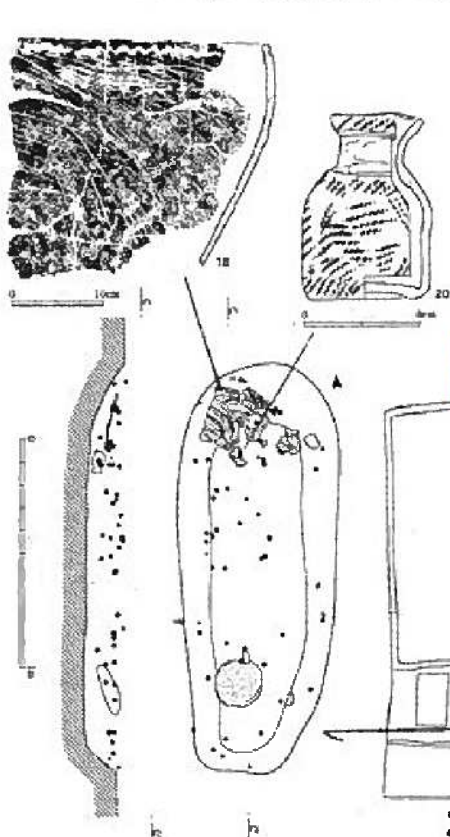
猫山遺跡のムラと壺再葬墓



1958年に発掘された再葬墓

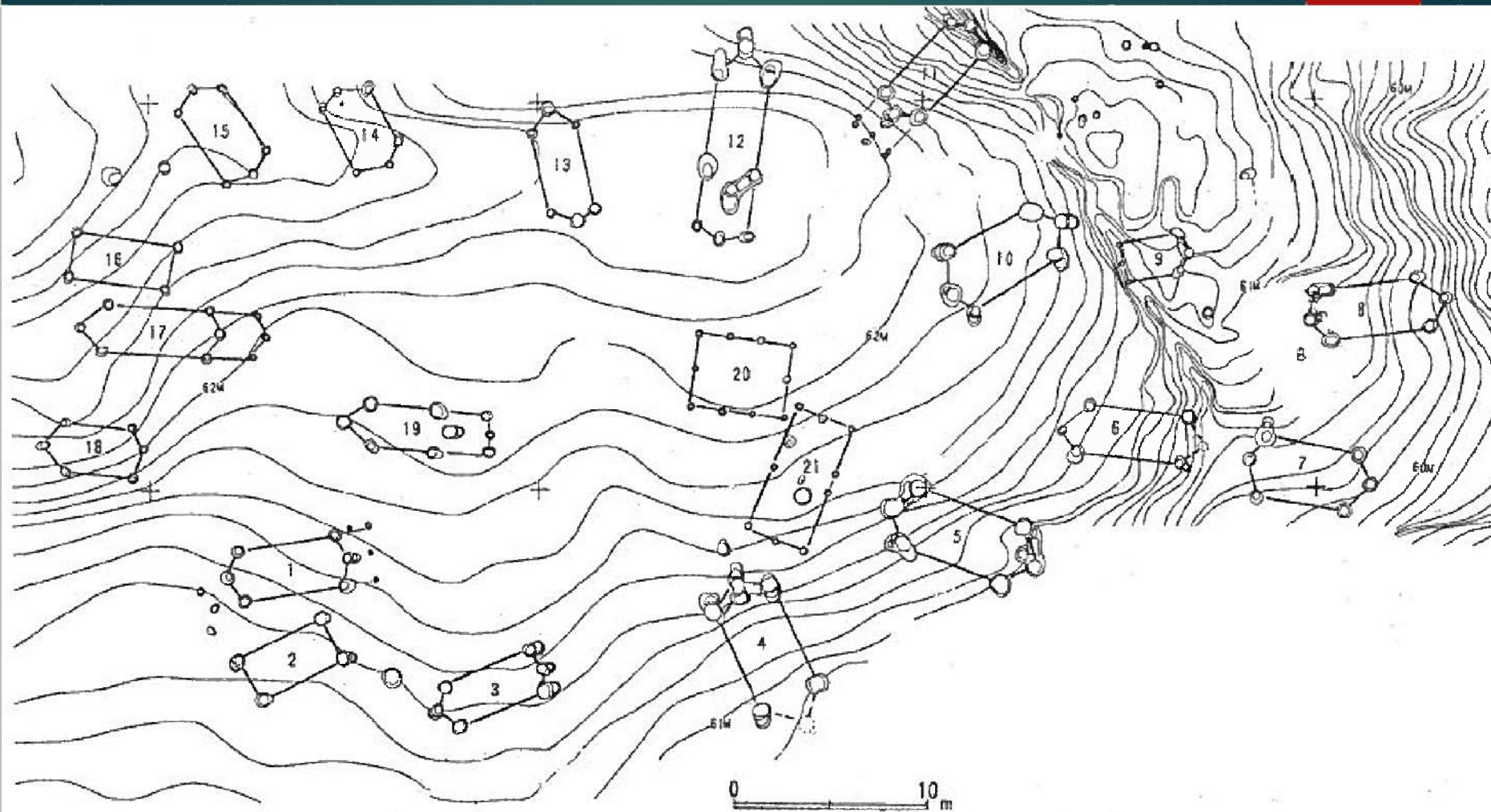


1958年出土弥生土器



2001年調査時の掘立柱建物群と土坑墓

三条市藤平遺跡の縄文時代晩期末の集落



⇒ 猫山遺跡のムラの姿は、縄文時代晩期からの伝統

生業(なりわい)がどうであったのかは、まだ詳しくはわかりません。

阿賀野市**六野瀬遺跡**で中期前葉の**土器に粃跡**が確認できますので、コメは知っていたはずですが、稲作が行われていたか、どの程度なのかは分かりません。

近年では、**レプリカ法**といって、土器をつくった際に付着した植物**種子の圧痕**を型どりして**顕微鏡観察**することでその種を同定する方法が盛んで、中部・関東では**アワ・キビ**がかなり利用されたことが分かっています。

しかし新潟県内では詳細に行われていないので、今後ぜひ実施してほしいところです。

生業の道具である石器をみると縄文時代晩期末と大きく変わらないので、植物栽培は低調だった可能性があります。

2. 中期中葉の変革(BC2世紀頃)とその後： 本格的農耕社会への転換と地域間交流

上に述べましたが、中期前葉から中葉にかけて東日本一帯の様相が一変します。東海道筋と北陸筋とでほぼ同時に、本格的農耕社会に大きく転換する動きが明確になります。ここでは新潟県域と関係する北陸筋からみていきましょう。

八日市地方遺跡

朝日遺跡

■北陸で起きたこの大きな転換＝イベントは、**石川県小松市八日市地方遺跡**の集落が中核となって実現しました。
この遺跡は前期段階から始まっていますが、中期の前葉に集住集落となり、居住域の周囲に濠が巡らされる(環濠集落)ようになります。石川県南部ではこの段階で唯一の環濠集落で、当地域の拠点をなす集落です。

居住域・墓域だけで直径500m近くにも。

その周囲(東側?)
→ 水田が広がる

そしてこの集落は中期後葉まで**長期にわたって継続**し、その**拠点性**は揺るぎません。

水田域は発掘調査されていませんが、集落中央を蛇行して流れる川跡から鋤・鍬など多数の木製農耕具が発見されたことから**本格的な稲作農耕村落**であることは確実です。

土器は、前代以来の伝統を保持する条痕文系土器に、濃尾平野周辺からの影響が加わり、さらに北近畿以西の櫛描文という新しいスタイルの土器の特徴が濃厚になり、そうした三つの系譜(土器製作技術・デザインの伝統)が合成されます。現在的な表現を借りれば**ハイブリッド**(異種混肴・雑種性)が実現し、私たちが**小松式土器**と呼ぶ全く新しい北陸独自の土器型式が形成されます。

もう一つこの八日市地方遺跡で重要なのは、この段階から大陸に由来する円筒形の**管玉**が、この地域特産の碧玉を用いて盛んに製作され、周辺諸地域に流通するようになることです。

小松式土器



八日市地方遺跡の玉生産

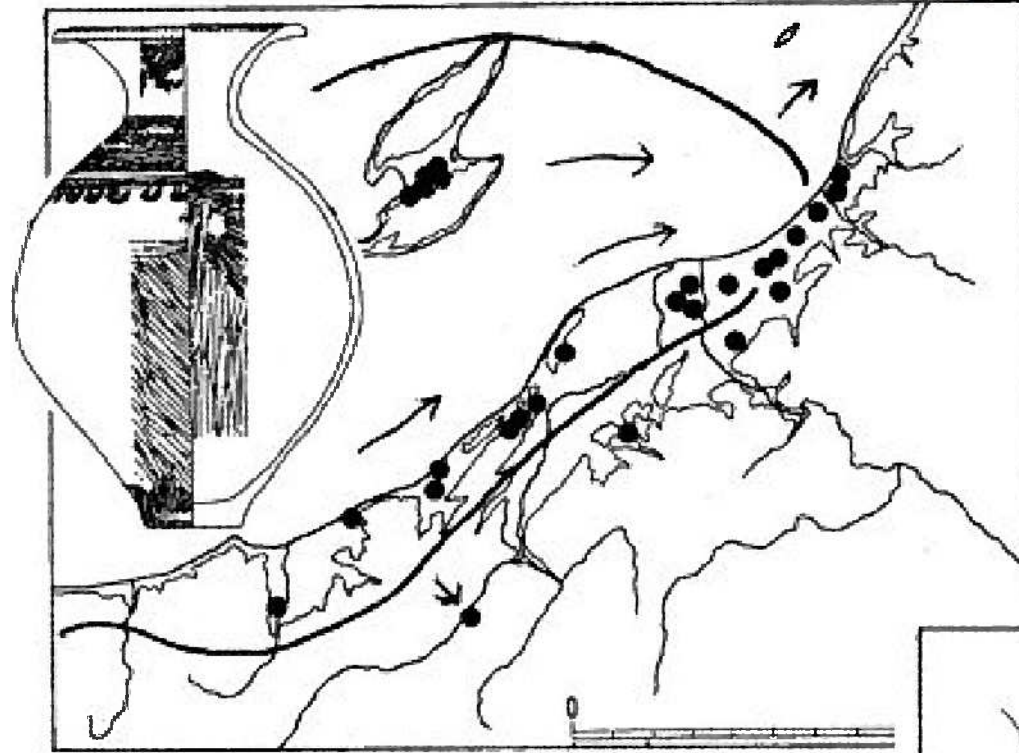
特産の碧玉で
装身具をつくり
周辺諸地域に供給



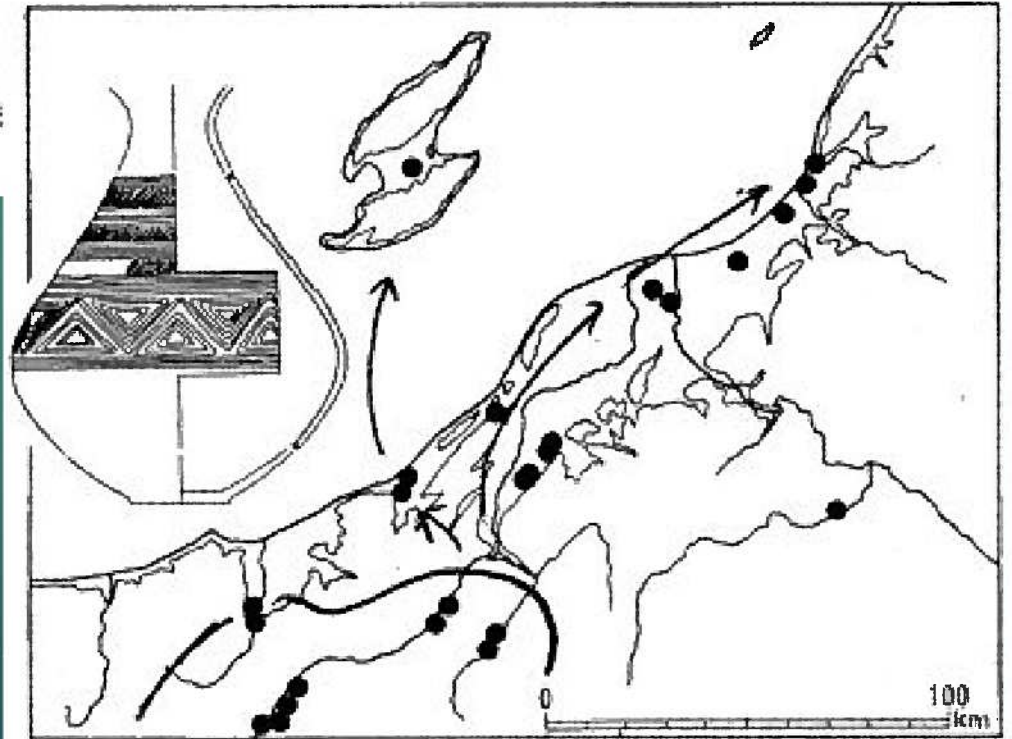
管玉に穴をあける
石針



糸魚川特産のヒスイで勾玉も



北陸系(小松式)

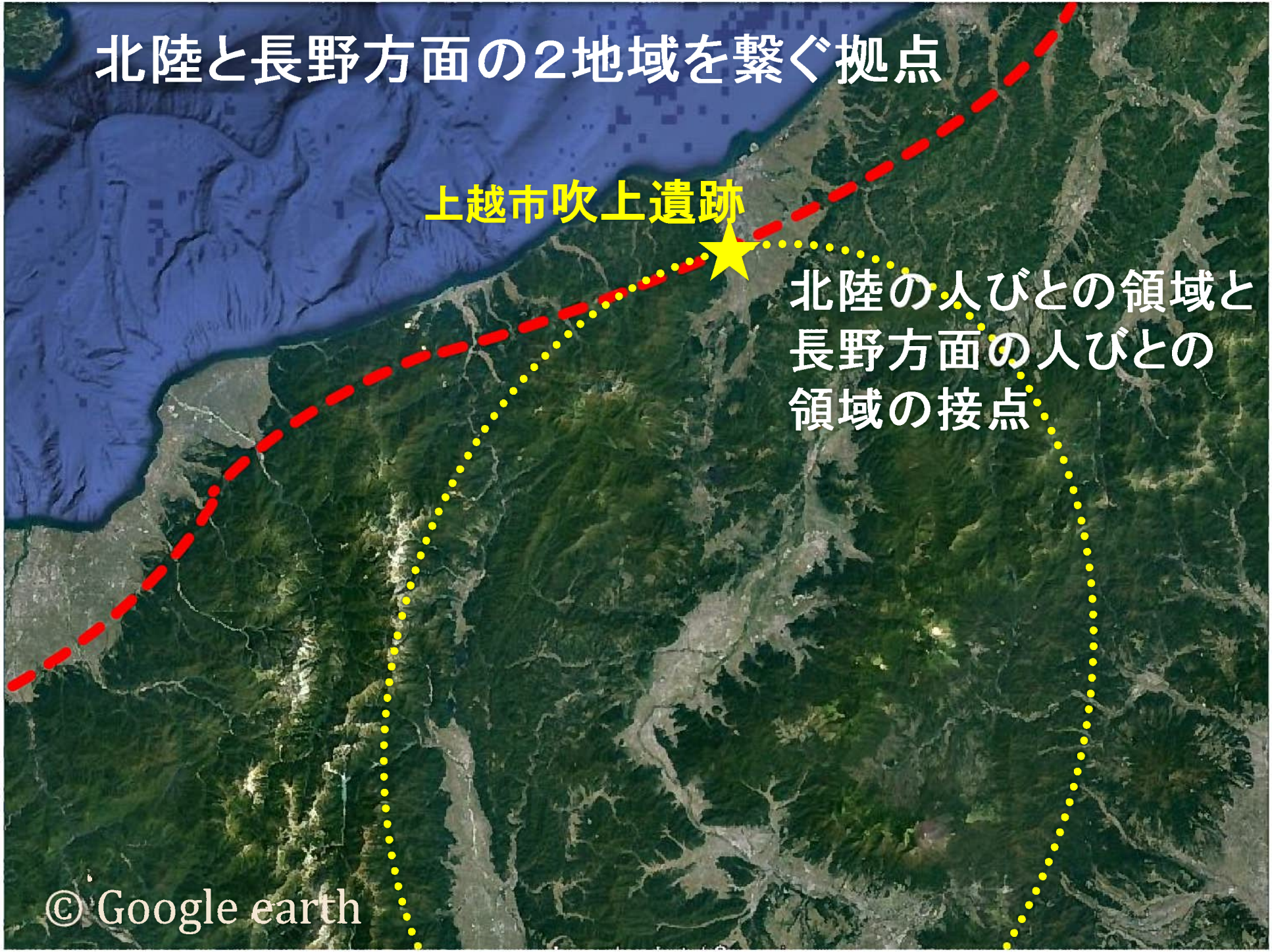


長野系(栗林式)

北陸と長野方面の2地域を繋ぐ拠点

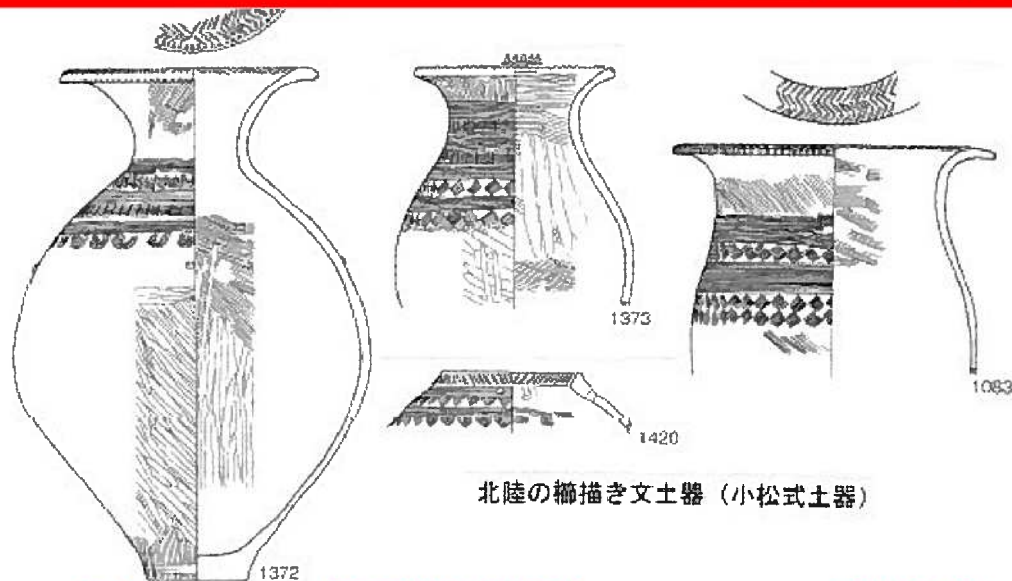
上越市吹上遺跡

北陸の人びとの領域と
長野方面の人びとの
領域の接点



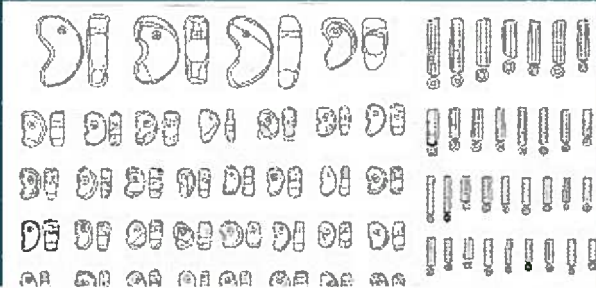
北陸と長野方面 の土器型式が共存 ＜中期中頃の場合＞

北陸の土器型式

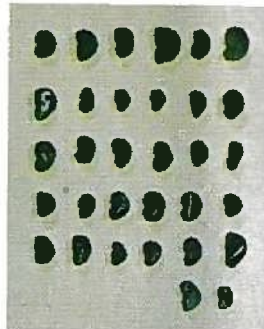


長野方面の土器型式

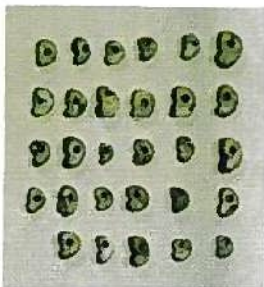




管玉



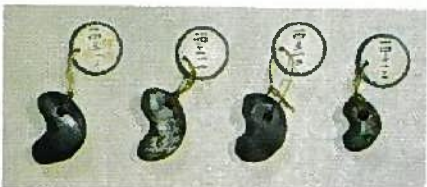
勾玉



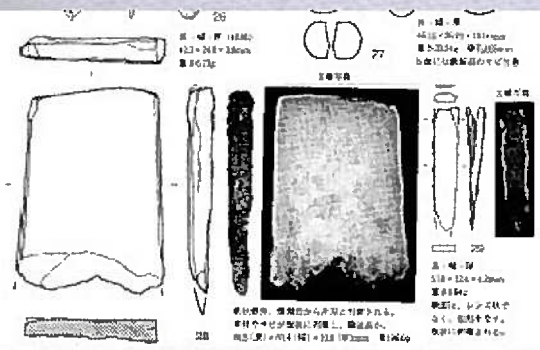
勾玉



弥生式土器



勾玉



佐久市社宮司遺跡の管玉・勾玉・多鈕鏡・鉄器

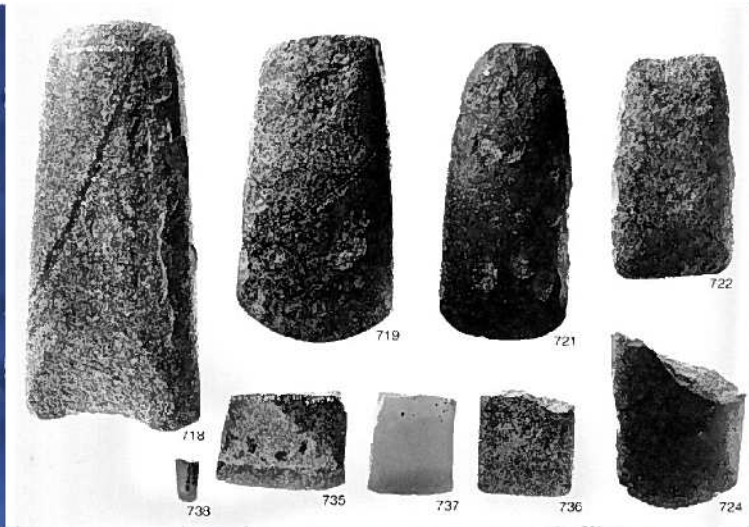
長野市光林寺裏山

長野県内各地で成品が出土

岡谷市天王垣外遺跡

吹上ムラを行き交う各地の物資・技術・情報





吹上遺跡の磨製石斧

吹上ムラを行き交う
各地の物資・技術・情報

吹上遺跡

北陸のほぼ全域で出土！

Google earth

Data SIO, NOAA, U.S. Navy, NGA, C
Image Landsat / Copernicus



長野盆地で製作